序

略名で『法華論』と呼ばれている本テキストの具名について、これを『高麗初雕大蔵経』（一〇八七年に完成）に求めれば、現存する二種類の漢訳のうち、勒那摩提共僧朗等訳では「妙法蓮華経論優波提舎」と、菩提留支共曇林等訳では「妙法蓮華経憂波提舎」となっているが、本書では、このいずれでもなく、そのタイトルとして「妙法蓮華経優波提舎」を用いている。一見すれば、「両訳を都合よく組み合わせたか」のようにもみえるだろうが、何よりも精確さが要求される「文献学的研究」において、そのような加減は論外の外である。じつは、これは日本の版本において示される表記にならってそれを起したものである。

本書におけるタイトルの用い方からもわかるように、本書は、この版本を研究の中心に据えながら、『法華論』のテキストは言うまでもなく、その注釈書をも視野に入れて、関連する諸問題について扱っている数編の論攷等を集めて一冊にしたものである。

とくに本書では、平成二十九（二〇一七）年に、当時、副主任であった筆者の要望と、これに応じてくださった望月海慧所長の英断により、身延山大学国際日蓮学研究所に所蔵されるようになった、稀覯本で世に指折りの数しか現存していない叡山版「寛永二年版『法華論』」に加え、昭和六十三（一九八八）年に、身延山短期大学学園図書館（現、身延山大学附属図書館）の竣成を機に、本館に寄贈されるようになった、坂本日深文庫の貴重本「正保三年版『法華論』」の影印を収録するなど、この版本『法華論』に対する初の本格的研究を意図している。この版本の持つ重要性については、各論において述べることにしたい。

さて、本研究所では、望月海慧所長をユニットリーダーとする「法華経研究班」が、平成二十五（二〇一三）年度より研究活動を開始させて以来、これまでに様々な研究成果を挙げてきているところである。中でも、筆者にとって印象深く記憶に残っているものをいくつか挙げるとすれば、学会発表としては次のようなものがある。

第六十六回日蓮宗教学研究発表大会（平成二十五年十月二十五日、立正大学）

非漢文文献法華章疏について　研究代表者　望月海慧
チベットの仏典目録にみられる漢文蔵訳文献について　庄司史生
コータン語『法華経綱要』の研究史と概要　片山由美
ウイグル語訳『妙法蓮華経玄賛』の研究状況と課題　金　炳坤
チベット語訳『妙法蓮華註』の序論の構成について　望月海慧

日本印度学仏教学会第六十五回学術大会（平成二十六年八月三十日、武蔵野大学）

内陸アジアにおける法華経の展開　研究代表者　望月海慧
梵語古写本と漢訳から見える《法華経》の成立と展開　辛嶋静志
コータン語『法華経綱要』と『法華論』　片山由美
チベットにおける『法華経』の用法――一乗思想と観音信仰――　槇殿伴子
『法華玄賛』のチベット語訳の特徴　望月海慧
西域出土法華章疏の諸相　金　炳坤

とくに後者については、そのパネル発表の総合テーマが、科学研究費基盤研究(c)に採択され、昨年度までに望月海慧博士によって、チベット語訳『妙法蓮華註』の和訳（全訳）が完了し、これが「令和元年度坂本日深学術賞」として実を結んでいる。

さらに、平成二十七（二〇一五）年九月四日発行の『中外日報』の記事「『法華経』研究の世界拠点」（八面）においても紹介されているとおり、まさにその実現に向けた数多の取り組みの中の一つとして、同年より『法華経研究叢書』の刊行という新企

画が発動し、第Ⅰ巻にあたる『法華経関係文献目録』（洋書）は望月海慧博士が、第Ⅱ巻にあたる本書は筆者が担当することになり、これが同時進行で遂行されてきたのである。

ところで、ちょうど時期を同じくして、筆者は『法華論』の注釈書について、それぞれが認識を共有しながら、桑名法晃先生とは、義寂釈・義一撰『法華経論述記』の文献学的研究を、中井本勝先生とは、吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究を進めていたところであり、また金天鶴博士からは、円弘撰『妙法蓮華経論子注』の翻刻データのチェックを依頼され、それを行っている最中であったのである。

そして、この三者三様の冒頭部において共通するフレーズこそが、本書のキーワードとも言える「経曰帰命一切諸仏菩薩」（以下、帰命頌）という一文になるのである。つまり、十世紀以降の成立である各種大蔵経においてこの一文を有する『法華論』のテキストは存在せず、これが八世紀初頭以前の成立である注釈書でしかみられないということ。誰も問題視しないこの問題が、本書の構想を練り始めていた頃の筆者の意中に、解くべき謎の一つとしてあったわけである。

それが、本書の方向性を決定する直接的なきっかけとなった、桑名法晃先生からの吉報により、新たな活路が見出されたのである。すなわちそれは、十七世紀の成立である日本の版本（以下、和刻本）において、この一文がみられるということであった。

これはつまり、歴史的な重みを秘めたるこの一文が媒介となって、新しいものからの古き時代へのワームホールが開かれたということを意味する。要するに、成立こそ新しいものの、帰命頌を有する和刻本と、各種大蔵経の中に収められているテキストよりも、はるかに古いテキストに依っている注釈書において、この帰命頌に対する注釈が施されていることから、両者が所依とした『法華論』の底本が、本論の古形を示す同系統となり得るという推論を可能にしたということである。本書収録の筆者の論攷では、この仮説について検討している。

総論はこの辺にしておいて次に各論に入り、本書の構成や内容について述べるとしよう。

冒頭を飾っている望月海慧博士の論攷は、専門領域であるインド・チベット仏教の観点から、次の三点について考察するもの

である。まず、世親に帰される漢訳・チベット語訳の大乗経典の注釈書を範疇に収め、その著者性について講究しており、次にテキストについては、いまや逸して伝わらないチベット語訳に触れるなどして、本論の流伝について論じている。最後に本論の概要を示して、もって『法華論』の全体像について解説する。

桑名法晃先生の論攷は、筆者との共同研究による成果を踏まえた上で、さらに独自の物差しをもって、一段と研究を進展させたものである。その要諦を言えば、本論に対する本邦初の国訳である、清水梁山師の「国訳妙法蓮華経優婆提舎」の底本が、正保三年版に代表される和刻本であることを明らかにしている。但し、中において分類（基本的には本書収録の寛永二年版と正保三年版の二種類に大別）される和刻本のうち、これがいずれの版にあたるかまでは特定していない。ともあれ、この見解によって、日本の近世以降、近代初頭に至るまでの『法華論』研究のスタンダードテキストというのが、他ならぬ和刻本であったということを再認識させるなど、和刻本に対する新たな価値づけをなし得たという点で、注目すべきであろう。またこのスタンスは『法華論』に限らずしてあまねく適用できるものと考えられる。

筆者は多機能を有するＣＢＥＴＡ派であるが、ともかく「大正新脩大蔵経テキストデータベース」の出現は、その「検索」という機能を通して、テキストごとの参照関係をより明確に示してくれるなど、仏典研究の飛躍的な向上を後押ししてきたという側面も確かにある。しかし、一方においては、これに頼り切っているばかりに、それまでに主流として用いられてきた写本や刊本を、まるで漢訳に際し、訳し終われば捨て去る原典であるかのように、結果として、これらを併せて対象の中に含めて吟味させる余地を奪ってしまったということも言えよう。そのような意味においても、本研究は、いつしか忘れられてしまった写本や刊本の重要性を再想起させるものと言えるであろう。

続いて、今後の版本『法華論』研究に資するべく、前述の二種類の影印を配し、もってその基礎的研究の土台となるテキストを資料として提示している。なお、写真撮影にあたっては、身延山大学附属図書館の宇佐美玄秀事務長と株式会社イーフォーの河又浩昭社長にご協力いただいた。ここに記して感謝の意を表する次第である。

影印に続く、身延山大学附属図書館の沼田晃佑事務長の資料は、筆者がその付記において述べているとおり、坂本日深文庫本を初めて影印出版するにあたり、本文庫の来歴や性格について紹介すべく、執筆を依頼したものである。とくに本文庫の中には「岩波文庫法華経原稿控」や「同上校正控」など、法華経研究において資料的価値を有するものが多数含まれているため、今後の関連研究の展開が待たれるところである。

筆者による二本の論攷と一本の資料は、インド・チベット、日本と続いて、今度は、東アジア仏教（敦煌を含む）における『法華論』の流伝に関する諸問題について考究するもので、「経曰帰命一切諸仏菩薩」という一文を手がかりとして、この一文に対する金天鶴博士の「第三のテキスト」という指摘と、この一文を出発点とする桑名法晃先生の「版本の研究」を踏まえた上で、本論の中国・韓国（吉蔵、義寂、円弘）、或いは日本（円珍）において撰述された注釈書の、日本における変容（和刻本による補入）について検討し、その成果を取り入れながら、本論のオリジナル形態を想定しつつ、序品を中心として、八世紀初頭までに流布していたものとみられる①「流支訳『法華論』の古形」の全貌に迫っている。

その全容については、見やすさを考慮して工夫を凝らしている「〈資料〉『法華論』諸本校合（二）」を参照されたい。資料については、細心の注意を払ったつもりであるが、不備があるとすれば、ご教示願いたい。なお、資料作成にあたっては、教え子である髙谷郁博、近藤慈英氏の助力を得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。

その他、見直されるべきテキストについては、韓半島において流布していたものとみられる②「留支訳『法華論』の別本」についてこれに初めて論及しており、十二世紀以降に開版された各種大蔵経の中に収録されている③「摩提訳『法華論』の別本」について検討を加えるなど、その背景に対する理解が不十分であったテキストについて紹介することで、本論のテキストに関する研究の抜本的な見直しに迫る新常識を提供している。

なお、詳細については各論に譲りたいが、ここでもう一度、本論の研究史上における版本『法華論』の意義について触れておくと、これが流支訳『法華論』の古形を示すものであること、それがために、清水梁山師の国訳は、再評価されるべきであるこ

とを改めて指摘しておきたい。

以上をもって、書き手はつまらないが読み手がすぐれていると信じて、当『法華経研究叢書Ⅱ』に収録されている四本の論攷とそれぞれ二本の影印と資料に対する、筆者による紹介とさせていただきたい。

同年代の研究者に比べて研究歴の浅い筆者にとって『法華論』との付き合いは比較的長いものである。奇しくも筆者の学部における卒業論文のタイトルは「『法華論』の研究――『法華論』の底本に関する一考察――」（指導教授・三友健容博士）であったのである。そのような経緯もあって『法華論』は、筆者の研究人生において、その始まりに位置づけられるのである。本書における筆者の筆は、それ以来、粛々と積み上げてきた小さい成果の一部をまとめたものである。願わくは、本書が指標となり、本論のテキストに関する研究水準が一段と高まることを期待したい。

最後に、本書の出版にあたりご協力いただいた関係各位、并びに知力はもとより時間と体力を要する執筆や校正作業にご尽力いただいた執筆者各位に心より感謝申し上げる次第である。なお、本書の編集にあたっては、岡本一平先生に多くの助言を賜った。ここに記して感謝の意を表する次第である。

令和二年三月二十三日

編者　金　炳坤　識